

藤並の森

Vol.9

高知県立
文学館



●仁淀川のベニシジミチョウ (写真提供/三宮健秀氏)

リレー随筆⑨ 「宮尾登美子展」によせて——宮尾登美子

ここ五、六年ほど前から「宮尾登美子展」の企画がたびたび舞い込み、そのたびにお断り申し上げて来たが、ここに来て逃げ切るわけにもいなくなり、いずれ、ただいま連載の「宮尾本平家物語」が完結する五、六年先には、お受けしなければなるまい、とそろそろ肚を決めかけていたところ思いがけず故郷の文学館で、突然、「宮尾登美子展」が開催されることになった。

たかが物を並べるだけの展覧会に何故こうも腰が重いかといえば、作家展ほど大変なものはなく、それが生前展なら本人、没後展なら遺族もしくはそれに代わる人の努力なくしては、決してよい展覧会は開催できないからである。

最近私が関わった中に恩師宇野千代さんの展覧会がある。これは、長年付添った秘書の藤江淳子さんがいなければ、決して成功しなかったであろうと思われるほど、細やかで立派な展覧会であった。

藤江さんは古くから、宇野さんが書き損じた原稿やメモを屑籠の中から拾い出し、丁寧に保存してあったし、書類などもきちんと管理し、食べ物、着る物の好みまで本人以上と思えるほどに詳しかった。

会場には、宇野さんの原稿や写真が年代順にくまなく並べられ、宇野さんの故郷岩国の生家までが復元され、一

目瞭然、宇野千代文学の魅力が解明されたが、このように完璧な没後展は、そういく度もお目にかかることは出来ないであろう。

私などは、土佐でいう「おいさがし」な性格の上に、これまで運命の変動にいく度も見まわれ、手元には、日記以外、写真の一枚も残されていない。

満州で身ぐるみ剥がされ、引き揚げて日本に戻れば、実家は戦災に遭って焼けており、また無一文で上京する節、何もかもなくしてしまった上、転々と仕事場を変わって目ぼしいものは失ってしまった。せめて生原稿が残っていればいいのだけれど、これも散逸して半分以上は行方知れずである。

私も今年で作家生活二十七年、願わくばデビューのときの「権」から現在執筆中の「宮尾本平家物語」まで長篇ばかり二十一作、生原稿を並べてみていただきたいところだが、右のような不心得の理由で、原稿は至って少ない。

本来をいえば、展覧会のご辞退申し上げたく、渋りつづけていたが、県立文学館の方々の熱意に負けての展覧会開催の運びとなった。

結果として、私の生活臭が感じられる生前展となったが、私の生きた昭和の年代と照らし合わせながらご覧いただければ幸いである。

◆次回企画展によせて◆

平成12年7月8日(土)～平成12年8月20日(日)
高知県立文学館二〇〇〇年夏季特別展
「幻の童謡詩人・

金子みすゞの世界展」



20歳のみすゞ

金子みすゞという、大正時代に彗星のように輝いたひとりの詩人がいました。

二十歳の頃から童謡を書いて雑誌に投稿し、西條八十に「若き童謡詩人中の巨星」と賞賛されて将来を大いに期待されていたにもかかわらず、二十六歳という若さで自ら短い生涯を閉じた詩人です。

深く温かなまなざしで生命をみつめ、宝石のように美しい言葉を残しながら、その作品は長い間埋もれ、「幻の童謡詩人」といわれていました。しかし、児童文学者・矢崎節夫さんの熱意により、没後半世紀を経てよみがえりました。

矢崎さんは、大学生の時、偶然金子みすゞのひとつ一つの詩に出会ったことから衝撃を受け、そののち十六年にもわたる熱心なみすゞ発掘の旅をはじめました。

矢崎さんが大きな衝撃を受けたその詩は、みすゞの「大漁」という作品でした。「朝焼け小焼けだ／大漁だ／大羽鰯の大

漁だ／濱は祭りの／ようだけど／海のかなでは何萬の／鰯のとむらい／するだらう。」

昨年から、金子みすゞの没後七十年を記念した初の展覧会「金子みすゞの世界展」(朝日新聞社主催)が、下関、大阪、東京など、全国各地で開催され、大きな反響を呼びました。今年、高知県立文学館でも四国で初めてこの展覧会を開催します。



みすゞ(本名テル)は、明治三十六年(一九〇三)、山口県大津郡仙崎村(現在の長門市仙崎)に生まれました。父親は幼い頃に亡くなっていましたが、兄弟に、二歳年上の兄・堅助、二歳年下の弟・正祐がいました。弟の正祐は、父亡き後、母ミチの妹の嫁ぎ先である下関の上山松蔵の養子として、みすゞとは離れて暮らすことになりました。

仙崎は、日本海に面した漁港で、みすゞの家はそこで「金子文英堂」という書店を営っていました。幼いころから本に囲まれて育ったみすゞは、好奇心にあふれ、ゆたかな自然の中で明るくのびやかに友達と遊び、心楽しい子供時代をすごします。

大正五年(一九一六)四月、みすゞは大津郡立大津高等女学校に入学します。みすゞは成績優秀で、国語や歴史だけで

なく、数学や理科にも秀で、学年でもいつも二番か三番でした。同窓会誌にもみすゞの文章は多く掲載され、いきいきとした学生生活を送っていました。同級生の印象に残っており、一年後輩の生徒も「金子さんは笑顔のとてもいい方で、学校や道で顔をあわせると、ほっと笑うのです。その笑顔を見ると、こちらまでうれしくなって、みんな金子さんのことをあこがれていました」とみすゞの美しい笑顔についての思い出を語っています。

みすゞが女学校三年のとき、母ミチの妹、フジが亡くなります。やがて、夫を早くに亡くしているミチと、妻であったフジを亡くした下関の上山松蔵との間に再婚の話が持ち上がります。そして、大正八年、ミチは上山松蔵と再婚し、松蔵の経営する下関の書店「上山文英堂」に入ります。そこには、幼い頃に上山家に養子に出した、みすゞの弟・正祐がいました。

みすゞや、みすゞの兄・堅助は、正祐が弟だということを知っていました。正祐自身には養子の事実は隠されていました。そのため、正祐はみすゞのことを長い間従姉だと思っていたのです。しかし、養子であることは隠されたままでしたが、この再婚を機に、正祐はしばしば下関から仙崎にやってくるようになり、疎遠だった正祐と、みすゞ、堅助の三人の間には、文芸サロンともいうような親

密な交流が生まれます。

兄・堅助の結婚を機に、女学校卒業後も仙崎で暮らしていたみすゞを、母ミチは下関に呼び寄せます。大正十二年四月、二十歳のみすゞはふるさと仙崎の後に、上山松蔵の経営する下関の「上山文英堂」に生活の場を移しました。「上山文英堂」は、支店をいくつも持つ大きな書店でした。みすゞは、本店からわずかな距離にあったその支店に一人店番として勤めるようになります。ここでみすゞは、大好きな本に囲まれて、好きなときに好きなだけ本が読めるという夢のような日々をすごします。

この頃、「赤い鳥」をはじめとする童謡童話雑誌が次々と誕生していました。みすゞもこの流れに刺激を受けて、手帳に自作の童謡を書きとめるようになり、西



雑誌「童話」(復刻版)

條八十が選者を務める雑誌『童話』に作品を投稿しはじめます。みずゝの投稿する作品は西條八十の目にとまり、やがて「若き童謡詩人中の巨星」とまで言われ、その将来に大きな期待を寄せられます。大正十三年、西條八十が渡仏し、『童話』の選者になると、みずゝは作品の投稿を控え、かわりに『琅玕集』と名付けた手づくりの詩集を作り始めます。自分の好きな詩人たちの作品を書き写したもので、『琅玕』とは宝石の一種で、みずゝは大切な詩を集めた宝箱のような意味でこの詩集を作ったのでしょう。

みずゝが下関に来たときから、正祐との交流もさらに身近なものになっていきます。みずゝにとって正祐は、一番の理解者となるのです。みずゝも、『西條（八十）先生と坊ちゃん（みずゝが正祐を呼ぶ時の愛称）とさえに判ってもらえれば、それでいい』と語っていたといいます。

大正十四年末頃、正祐のみずゝに対する恋心に気づいた周囲の人たちは、正祐には内密に、みずゝの結婚相手を探し始めます。そして、選ばれたのは上山文英堂の番頭候補の人でした。

正祐はその結婚に猛反対し、みずゝ本人にも涙ながらに談判します。けれども、「結婚をするな」という正祐の言葉に、みずゝは「もう決めたことだから仕方がないの」と答えました。叔父松蔵が決めたことを受け入れることが、正祐にとっても、松蔵と再婚した母にとっても、そして自分自身にとっても一番いいことだと思ったのでしょうか。この時、正祐は長い間心に引っかかっていたことをみずゝに尋ねます。「テルちゃんと僕は姉

弟ではないか」。一瞬みずゝは正祐の顔を見つめ、それから静かにうなずいたといひます。みずゝはその後、正祐に自筆の童謡集『美しい町』と『空のかあさま』を預けます。ちいさな手帳に自筆で書きためた童謡集です。これが後に幻の童謡詩人であった金子みずゝのよみがえりにつながる三冊の手帳のうちの二冊でした。みずゝは結婚前までに、没後に全集として発刊される三冊のうち、すでに二冊、三百五十篇以上の作品を仕上げていたのです。

大正十五年二月十七日、みずゝの結婚式は上山文英堂で行われました。上山文英堂の二階で新婚生活をはじめたみずゝでしたが、一緒に仕事をしている芸術家肌の正祐と、商売上手な夫との対立、さらに夫の女性問題などが原因で、半年も



三冊の手紙

経たないうちに叔父松蔵から二人の別れ話を持ち出されました。しかし、このときすでにみずゝの中には新しい生命が宿っていました。そのため、別れ話は中止され、夫とみずゝは文英堂を出て、近くに新居を構えることになりました。

大正十五年十一月、長女のふさえ誕生。ふさえが生まれてから、みずゝはとても明るく元気になります。可愛い娘の成長を見守ることに新しい希望を見いだしたみずゝは、投稿の数も減るようになります。正祐は、そんなみずゝに不満で、「テルちゃんは平凡になった」「少しずつでも作っていったらいいがでしよう」と励ましたりしています。けれども、みずゝはその頃、夫から童謡を書くことを禁じられ、また同時に病気で体調を崩していききました。『美しい町』『空のかあさま』『さみしい王女』の三冊の童謡集を清書したみずゝはそれ以後創作をすることはありませんでした。

昭和五年に入り、みずゝの生活は心身ともにますますつらいものになっていきました。病氣もよくなることはなく、残りの時間をふさえのために使いたいといひ、みずゝは夫と別れることを決意しました。けれど、離婚成立後、いったんはふさえをみずゝのもとで育てる条件を受け入れた夫から、すぐにふさえを返すよう要求が来ました。みずゝは、決して子供を夫のもとに預けたくありませんでした。ふさえには心の豊かな子供に育ってほしいという願いがあったからです。夫にはそれができないということがみずゝにはわかっていました。そして、みずゝはある決心をするのです。

三月九日、みずゝは一人で写真館に行き、自分の写真を撮りました。その日の晩は、夕食後、ふさえを風呂に入れてやり、たくさんの童謡を歌ってやったといひます。やがて、ふさえがミチとともに床につくと、みずゝはふさえの顔を覗きました。「かわい顔して寝とるね」。これがみずゝの最後の言葉でした。二階にあがっていったみずゝは、三通の遺書を残しています。夫には「あなたがふうちゃんに与えられるのはお金であって、心の糧ではありません」と。母ミチと松蔵には「くれぐれもふうちゃんのことをよろしく頼みます」「今夜の月のように、私の心も静かです」と。そして正祐にあてた一通の結びにはこうありました。「さうらば、我等の選手、勇ましく往け」。

翌三月十日、上山文英堂の二階で、みずゝはみずから二十六歳の短い生涯を閉じました。

あまりに短い生涯でしたが、彼女が遺した多くの作品は、没後七十年経ったままだに今、私たちが忘れていたあゆむものを、やさしい言葉で呼び起こしてくれています。この展覧会でみずゝの詩にふれ、何かに出会っていただければ幸いです。

関連イベント

（詳細は裏表紙カレンダー参照）

- * 7月2日(日) 14:00から
「金子みずゝ作品朗読会」
- * 7月8日(土) 10:00から
オープンニング式典（みさえのオムツ、長女・上村さん、矢崎節夫さんらによるテープカット）
- * 7月23日(日) 18:00から
「詩と童謡コンサート・金子みずゝのうべ」

学芸員メモ

春季企画展「没後40年 追憶の吉井勇」を終えて～勇と土佐



「没後40年 追憶の吉井勇」会場

平成十二年四月十五日から始まった春季企画展「没後40年 追憶の吉井勇」は、五月二十八日で閉幕となった。会期中には、県内外からたくさんの方々に足を運んでいただいた。「資料が多すぎて一度では、すべてが見られなかったのだ。」と、再度、ご来館くださった熱心なファンの方も少なくはなかった。また、「この場所、知っちゅう。今とちよつと違うねえ。」「家の近所の人が吉井勇とおたことあると。（会ったことがあるそうだ。）」などと話し合う小さな声が会場のあちこちで聞こえるたびに、土佐に住んだ人間「吉井勇」を改めて身近に思った。「吉井勇が香北町にいたとは知っていたがこんなに偉い歌人とは知らなかった。」とのアンケートも多く見られ、勇の生涯と業績をゆかりの地・高知で紹介できたことの意義を深く感じさせられた。



記念講演会「追憶の吉井勇」

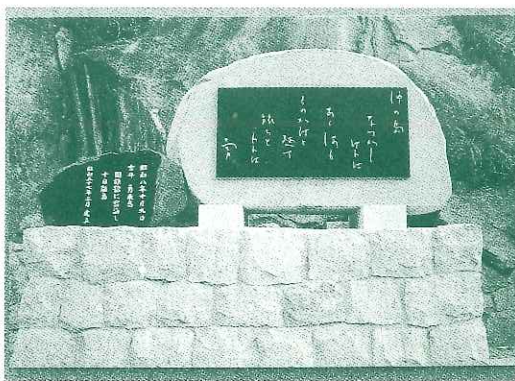
四月二十二日には、昭和三十一年から勇と親交があった妻鳥季男氏（吉井勇研究家）を講師に迎え、「追憶の吉井勇」と題した記念講演会が行われた。会場には、あふれるばかりの勇ファンが集まり、勇の生涯や偉業をたどり、勇と土佐の関わりなどをお聞きした。中には「今日の朝、知りました。」と東京から駆けつけてくださった熱心な研究家もいた。長男・吉井滋氏もこの日のために「来高、ご挨拶をいただいた。二部の「肉声を聞く」（昭和三十三年 RKCラジオ放送）では、高知花壇で対談をした時の勇の声に耳を傾け、当時は僂ぶとともに、滋氏のお声がそっくりなのに驚いた。」

「昭和六年五月、われはじめて土佐の国に遊びぬ。海あらかりしかども空あかるく、風光の美そぞろにわが心を惹くものありき。」（人間経）

勇は土佐商船の船で大阪から室戸岬を回って、初めて浦戸に着いた。当時、船が

棧橋に近づく船の事務長は乗客名簿を電信で知らせていた。これにより、伯爵吉井勇が乗っていることを知った係員は、棧橋で出迎えた。しかし、船から降りて来たのは、大きな体に着物を着ていたがみすばらしい感じすらする、お伴の人も連れず出迎えない勇だった。と「吉井勇と四国」太田三郎著に、書かれている。当時の伯爵としては、珍しいことで、そのころの勇の精神的経済的苦悩がうかがえる来高であった。勇は、高知市内はりまや橋近くの庶民的旅館「友の家」に滞在し、ほとんど外出せず静かに酒を飲んで心の悩みをまぎらわしていたようだ。

一人淋しく土佐の地を踏んだ勇だったが、土佐の明るい伸びやかな風土は、旅と海を愛する勇を優しく迎え入れた。そしてまた、傷心の勇を暖かく包んでくれる厚い人情を持つ多くの人々に巡り合い、彼等の案内によって土佐の地に遊んだ。



沖の島歌碑

「大土佐の海を見むとてうつらうつら桂の浜にわれは来にけり」（人間経、桂浜歌碑）

「空海をたのみまゐらすころもてはるばる土佐の国へ来にけり」（人間経、室戸岬東寺歌碑）

勇は土佐に着いて二、三日後、船の上から見たであろう室戸岬へ出かけた。そこで偶然、攻玉舎中学時代の旧友岡本重治と出会い懐かしい学生時代の話をしながら夜とお酒を酌み交わした。彼も、土佐の風土と純朴な人情に魅せられこの地に住み着いた人であった。勇は心休まるひとときを過ごしたのであろう。

「はるばると室戸岬にわれは来ていきどほろしく荒海を見つ」（人間経）

「わが心あらたにすべく土佐に来て室戸岬にのぼる日を見る」（風雪）

昭和八年には、土佐の最西端の足摺岬や叶崎、海を渡って沖の島などにも遊び、勇は土佐がますます気に入った。

「わが思ひなほほのかにも残りぬぬ室戸足摺岬みさきに」（人間経）

「土佐ぶみにまづしるすらくこの日われうれしきかもよ叶崎見つ」（人間経、叶崎歌碑）

「沖の島なつかしければ荒海ものかとは越す旅びとわれは」（人間経、沖の島歌碑）

そして、勇は土佐で得た生涯の友人伊野部恒吉の誘いで、樽材になる杉を見学する酒造家の団体と一緒に、安芸郡田野から森林鉄道に乗り有名な深山魚梁瀬にも行っている。

「大土佐の杉の年の輪見るほどにおのづからなる力湧き来ぬ」（随筆魚梁瀬の森）

閲覧室から



『一絃の琴』

宮尾登美子 著

第80回直木賞受賞作の宮尾登美子著「一絃の琴」は、土佐に伝わる「一絃琴」に魅入られ、物語の全編をとおして水のように流れる琴の音色に、自らを厳しく律し、凜と生きた土佐の女性達の姿が描かれており、第一章から第四章まで、激動の幕末から昭和にかけての百二十年間の歴史の流れがその背景にはあります。

「作品『一絃の琴』は方正、堅実、細緻な楷書の世界であり、草書、行書で書き流しておられる作品ではなく、女流の筆とは思えぬ重い文体であり、特に第一部は、鵬外の史伝小説をおもわすものがある。」とかつて小松伸六氏が評されたように、言葉を大切に一字一句が丁寧に取り扱われています。

上梓まで約十七年間の期間を要し、5回の推敲を重ね、直木賞受賞の際にも高い評価を得た『一絃の琴』。新装版刊行に際し、是非、読み返していただきたい一冊です。

二〇〇〇年二月十日(株)講談社

林、魚梁瀬歌碑」

「あかつきの霧に目ざめてたそがれの雲に寝るなり魚梁瀬大杉」(人間経)

昭和九年(一九三四年)、多くの苦悩を背負い人間葛藤に疲れ果てた勇は、永瀬瀬の紹介で泊まったことのある「猪野沢温泉」(香北町猪野々)の近くに草庵「溪鬼荘」を造り隠棲をする。ここでの生活で、勇は一人自分を見つめ、村の人々の温情に感じ、傷心を癒していった。再起を果たした勇は、高知市築屋敷に約一年間住み、昭和十三年(一九三八年)には、土佐から京都白川に移った。「あさみどり夏近ければほととぎす高知の城を鳴きて過ぐらむ」(人間経)

「鏡川の河原をさむわがゆけば朝戸出

の息とみに白しも」(風雪)

「土佐の神一言主のみことにも酒をささげて君をことほぐ」(人間経)

これらの歌からは、鏡川岸で、土佐神社で優しく微笑みたたずんでいる勇の姿が浮かんでくるようだ。

土佐の地で苦悩の中から再び立ち上がることができた勇にとって、その風土と友人はかけがえのない大切なものだった。ここでの生活は四年間と短かったが、勇と土佐との関わりは没するその時まで続いた。

今回の企画展は、長男・吉井滋氏から、貴重な遺品をお借りし、いろいろな思い出のお話もお聞きした。そのような中

で、滋氏も、また「土佐の自然が好きだ。」とおっしゃられたことがうれしく思い出される。また、妻島季男氏には資料提供や展示・図録にご指導をいただき、井上孝夫氏からほとんどの初版本をお借りした。勇再起の地・香北町からは貴重な軸や色紙を借用した。そのほか協力いただいた方々にも、企画展が盛況のうちに終了することができ、ご厚意に心から感謝を申し上げます。そして多くの人との出会いがあり、世の縁をあらためて感じさせられる企画展であった。

香北町では「吉井勇記念館」建設を予定しているらしい。再び「勇」の艶冶な世界に人間「勇」に触れることができる日を楽しみに待ちたい。(学芸課 嶋崎るり子)

県内同人誌紹介



海風

平成三年十月一日創刊。東京生活に終止符を打った国見純生が、帰省して発行した季刊の短歌結社誌である。毎号「一人一頁、十二首掲載」というゆったりとした割り付け。「リアリズム」の追求、「うららかな集団であること」をモットーとしている。三月月の制作の中からの力作の発表を期待している。近刊は35号。

最近発表されたエッセイは、国見純生の「上林晩のことば」「茂吉にかかわる拙作をめぐって」付・河野愛子さんのことと、榎原忠彦の「雅澄と茂吉の或る恋の歌」、藤田兆大の「啄木短歌に詠まれた女性たち」、梶田順子の「城西公園」など。最近出された歌集は、柴岡暎子の「日日花」、滝本玲子の「トネリコの花」、山本晶子の「新緑」。近刊は徳弘久の「櫻の花」。他に明神正春・石本幸美らがあり、約三十名の精鋭が出詠している。

編集・発行人 国見純生

発行所 高知市前里一六五―二 国見方

電話 088-875-4257



魚梁瀬歌碑

馬場孤蝶

『庚寅日記』

二月四日 火曜日 朝来曇天少シク寒気ナリシ暮相頃少雨 朝ヨリ日本人ヲ読ム 午後ハ本箱ノ片付ケナド為シ居ル内ニ時移リシカバ四時頃晩食ヲナシ直チニ帰院ノ途ニ上ル 例ニ依テ万世橋ヨリ鉄道馬車ニテ新橋迄行キ其レヨリ人力車三田二行キソレヨリ徒歩シテ学院ニ着ス 途中神田明神ノ手前ヨリ雨降り出デス サレドモ三田ニ至リシ頃ハ降り止ミタリ 夜ニ入りテ島崎氏ノ部屋ニ行キ種々談話ス 部屋ニ帰りテ後、日本之文華三号ヲ読ム 拾時二拾分頃外ニ出タルニ空ハ何時シカ晴レ行キテ一輪ノ皎月中天ニ輝クヲ見タリ

「孤蝶・藤村交歓の地」碑の近くから見た鏡川と筆山

藤村との交わり

小説、詩、随筆、英文学、翻訳、探偵物とバラエティーに富んだ文芸活動を展開した馬場孤蝶（一八六九—一九四〇・高知市金子橋）に、死後四十五年を経て刊行された日記群がある。

●明治二十二年日記（明治二十二年十月一日～同年十二月二十三日）

●庚寅日記（明治二十三年一月一日～同年十二月三十一日）

●閑中日記（明治二十五年五月一日～明治二十六年一月八日）

●帰郷日記（大正十一年七月十一日～十一月十七日）

『帰郷日記』以外は孤蝶の母校明治学院大学図書館から発刊された『明治学院史資料集第十三集』（昭和六十一年）『明治学院史資料集第十四集』（昭和六十二年）に収録されている。日記という私的書き物は篋底深く蔵われる運命にあるらしく、最初の日記の起筆の年まで溯れば実に百年近い歳月を要したことになる。

いずれの日記も「日記文学」など意識せず書かれており、学友、教師、義太夫、書物、講演料、タバコ銭、訪問客等々、日常些片に執っている。長らく陽の目を見なかつた原因も、そこらあたりにあつたように思える。

しかし明治時代の真摯な一文学青年とその文学的周辺の関係に目を凝らせば一字一字が磁力を帯びてくるのである。とりわけ『庚寅日記』は明治学院の同窓であつた島崎藤村との交情が随所に出現し、興趣は尽きない。

一月二拾六日（前略）島崎氏訪ヒ来テ種々ノ事語り出デヌ英文ノ草稿ヲ作レリ

二月四日（前略）夜ニ入りテ島崎氏ノ部屋ニ行キ種々談話ス 部屋ニ帰りテ後、日本之文華三号ヲ読ム 拾時二拾分頃外

ニ出タルニ空ハ何時シカ晴レ行キテ一輪ノ皎月中天ニ輝クヲ見タリ

二月拾二日（前略）四時より島崎氏部屋に行キ種々談話シ小説の題名五つを得たり「仙人。蜃気楼。花曇り。運氣。天の河。」之れなり（筆者注）この日はなぜかひらがなを使用）

四月九日（前略）此日課業モ事ナク済ミ晩食後サンタム館後ノ芝地ニテ島崎、赤田ノ二氏ト相撲ヲ取ル（後略）

四月二拾二日 此日仏語課ハ人少ニテ休ミ、ソレヨリ午後晩食後島崎氏ト近傍ヲ散歩ス（後略）

他に二人で火事見物に出かけたこと、藤村から文学書を受け取ったことなど、下宿生活の取るに足らぬ一コマ一コマが素つ気ないほど簡潔な文章で刻まれ、かえって活き活きとした影絵のように映し出されている。

そして三年後の明治二十六年二月二十三日、藤村は海路、高知を訪れる。

鏡川北岸の孤蝶の自宅（ハ孤蝶・藤村交歓の地ノ碑あり）に四泊した藤村は、恋人への思い、「文学界」創刊のことなどを孤蝶と縷々語り合つたのである。

後年名をなしたこの三歳年下の同窓生は孤蝶を端尻すべからず人物と敬愛していたようである。「桜の実の熟する時」の中で、「他に同級生は居ても特別の親しみが斯の部屋（孤蝶の部屋）へ来ると拾吉（藤村）の身に感ぜられる「直截に言つて呉れるものは斯の友達の外にない」と評し全幅の信頼を寄せていたのが窺える。

文学者への新芽時ともいえる青春時代の二人の交わりは淡泊かつ永遠的なものを孕んでいたようで、孤蝶もまた藤村の思い出を晩年に至るまで綴っている。（国則三雄志）

（二月四日記中のハ一輪ノ皎月中天ニ輝クヲ見タリノ碑は、山内神社境内東端にある。）

見どころⅡ ●土佐山内家宝物資料館

資料受贈報告

（平成十二年三月～五月）

敬称略

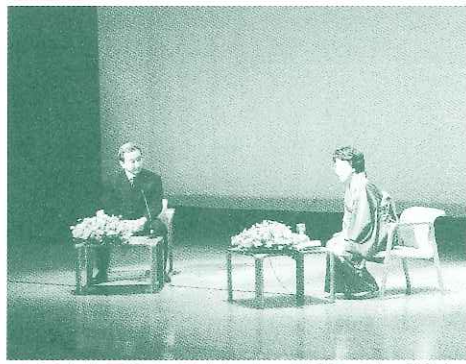
▼河上迅彦・「（詩集）体温」▼浜田万葉記の会・「萬葉集を読む 下巻」▼武者小路実篤記念館・「絵皿・看板・包装紙」ほか▼虚子記念文学館・「虚子記念文学館開館図録」▼芦屋市立美術博物館・「富田碎花の世界」▼西田谷洋・「語り 寓意 イデオロギー」▼中澤道子・「（句集）噴水」▼西内保衛・「（句集）琴ヶ浜」▼西静恵・「（歌集）椿咲く道」▼山中千代子・「（句集）小春日」▼片木英子・「片木太郎画集」▼大塩力藤・「私はボチ」▼仙台文学館・「ことばの地平」▼開徳恵美子・「地を這つて春夏秋冬五十年」▼土屋文明記念文学館・「群馬文学全集9巻」ほか▼市川敦子・「（歌集）金鳳花 第1集」ほか▼立原道造記念館・「立原道造と堀辰雄」▼前橋文学館・「安藤元雄「秋の鎮魂」から「めぐりの歌」まで」▼いの町紙の博物館・「PAPERWORKS 2000 INO」▼ふくやま文学館・「井伏鱒二と交友した文学者たち」ほか▼攻玉社学園・「攻玉社百二十年史」▼石川美代子・「（短歌・随想集）青鷲」▼猪野睦・「兆民研究14号」▼佐川町・「第10回佐川文芸賞入選作品集」▼岡本歩城・「（梨花五周年記念）合同句集」▼田中白歩・「白歩の書」▼橋詰緑・「想い出を散歩」▼土佐史談会・「長曾我部信親」▼さいたま文学館・「詩でつづる埼玉の風土」▼竹本義明・「漱玉吟社絶句」▼吉井滋・「好色一代女」外▼東京都近代文学博物館・「20世紀東京の文学（1）」▼世田谷文学館・「井上靖展」▼龍野市・「嗚呼玉杯と矢野勘治」▼姫路文学館・「有本芳水」▼小杉放菴記念日光美術館・「小杉放菴と近代文学」ほか▼妻島季男・「伊予の書」外▼西尾明澄・「夕暮れに苺を植えて」ほか▼JULA出版局・「みすずコスモス」ほか

◆◆◆文学館日誌 2000年3月～5月◆◆◆

3月

(ミニ企画「伝武市半平太白刃の短刀」を引き続き紹介展示中)

◆4日 「絃琴と上佐の女性を語る夕べ」宮尾登美子さんと橋本知事の対談を県民文化ホール(グリーン)で午後六時半から開催。近森律子氏の絃琴演奏もあり。ユーモアあふれるお話で約五百名の参加者を魅了。◆11日 浜本浩の長女山村泰さんと曾孫の山村準(ひとし)さんが来館。寄贈され展示中の短刀をご覧になる。◆12日 前日に引き続き山田さん来館。高知市在住で浜本浩の末弟、滋氏の長男の高木基晴氏も来館。◆14日 下知女性学級の皆さん来館。◆18日 菊池記念館来館。◆20日 東京の五十嵐千鶴子さん(五十嵐文吉遺族)来館。◆25日 第4回朗読の会。「梨の会」による田宮虎彦作「足摺岬」の朗読。◆29日 山形県文化環境部長来館。



宮尾登美子さん、橋本知事の対談「絃の琴」と土佐の女性を語る夕べ(3/4)

4月

◆2日 「北見志保子を偲ぶ、平城山鑑賞会」を開催。志保子の甥、笹田隼男氏も東京よりご参加下さる。市川敦子氏のお話、橋本嘉子氏らの琴演奏、高野招山氏の尺八、高野雅美氏のピアノ伴奏と歌、川田弘人氏の歌で「平城山」「九十九里浜」ほかを鑑賞、最後は約一二〇名の参加の皆さんとともに



ごあいさつなさる北見志保子の甥、笹田隼男氏(4/2)

「平城山」を合唱。◆15日 春季企画展「没後40年 追憶の吉井勇」開幕。文学専門講座「田岡嶺雲の『敦奇伝』を読む」開講。講師は徳島文理大学教授高橋正氏。◆19日 香川県県立高等学校から来館。◆21日 吉井勇長男、吉井滋氏、甥の長田淑氏来館。◆22日 春季企画展記念講演会開催。第一部では吉井勇研究家の妻島季男氏が「追憶の吉井勇」と題しての講演、第二部「肉声を聞く」では昭和32年録音の吉井勇の話を聴く。長男吉井滋氏のご挨拶もあり。参加者約120名。◆25日 刀剣研究家の小美濃清明氏ほか来館、伝武市半平太白刃の短刀をご覧になる。◆29日 第5回朗読の会。「風の会」による横溝正史作「百日紅の下にて」の朗読。



左から橋本嘉子氏、川田弘人氏、市川敦子氏、高野雅美氏「平城山鑑賞会」(4/2)

5月

◆3日 吉備路文学館で3月までご勤務され、4月より岡山大学大学院でご研究中の塩見曠氏が木村毅研究家の天児直美氏とともに来館。◆3、4、5日 開館時間を午後6時まで一時間延長。◆6日 田岡嶺雲専門講座(2回目)。◆18日 香北町の吉井勇記念館開設の実行委員会の方々ほか10名来館。松山市の吉井勇研究家の和田純一氏が前田利雄氏(北川村)とともに来館。◆20日 第6回朗読の会。「扇の会」朗読ひだかによる森瑞子作「夫の恋人」他の朗読。◆21日 青々さつき会来館。37名。◆23日 吉井勇出身の攻玉社中学(東京)の増本先生が来館(翌日も)。菊池記念館主催文学ツアール一行来館。50名。博物館実習(6月2日まで。高知女子大の二名が若さと熱意で頑張る。◆24日 本山町の藤原怜氏が来館。昭和8年のものと伝わる吉井勇の書軸(「春の日のうららかに照るなかにあてこころ空しく雁山を見る」)をお見せ下さる。◆26日 サザンクロスの会来館。14名。◆27日 田岡嶺雲専門講座(3回目)。◆28日 岡山のオリエント美術館友の会来館。39名。「追憶の吉井勇展」好評のうちに閉幕。総入館者数約二、二〇〇名。



左から妻島季男氏、吉井滋氏、長田淑氏、井上孝夫氏、伊野部昌一氏。記念講演会「追憶の吉井勇」(4/22)

文学館の今後の主な行事予定

◆金子みすゞの世界展

7月8日～8月20日

◆コンサート「金子みすゞのゆうべ」

7月23日 県民文化ホール

◆児童生徒文学作品朗読コンクール

(第一次審査)

大方会場予選 8月18日

安芸会場予選 8月21日

高知会場予選 8月24日

(最終審査)

11月5日 県立文学館

◆片木太郎の風景展

8月25日～9月16日

◆土佐の反骨・田岡嶺雲展

10月18日～12月3日

◆田岡嶺雲を語る国際シンポジウム

11月11日 文学館ホール

文学館図録の販売について

文学館のミュージアムショップでは、常設展示図録ほかこれまでの企画展図録を販売しております。

常設展示図録

「師弟が見た近代展」	2,100円
「浜本浩とその時代展」	1,260円
「夏目漱石と芥川龍之介展」	1,050円
「片山敏彦の世界展」	840円
「智恵子抄展」	1,365円
「司馬遼太郎展」	2,000円
「石川啄木展」	2,100円
「田中英光展」	1,260円
「岡本弥太郎展」	840円
「追憶の吉井勇展」	630円
「宮尾登美子展」	840円
	630円

高知県立文学館カレンダー

2000年
7～9月

	7月—July	8月—August	9月—September
7月～9月に生没した常設展示の作家たち			
常設展示	生まれ	死亡	生まれ
	小山いと子 1901年(明治34) 7月13日	1989年(平成元) 7月25日	田岡 典夫 1908年(明治41) 9月1日
	宮崎 夢柳	1889年(明治22) 7月23日	横村 浩 1938年(昭和13) 9月3日
	大江 満雄 1906年(明治39) 7月24日		田岡 嶺雲 1912年(大正元) 9月7日
	田宮 虎彦 1911年(明治44) 8月5日		幸徳 秋水 1871年(明治4) 9月23日
	司馬遼太郎 1923年(大正13) 8月7日		鹿持 雅澄 1858年(安政5) 9月27日
	浜本 浩 1890年(明治23) 8月14日		大原 富枝 1912年(大正元) 9月28日
	上林 暁	1980年(昭和55) 8月28日	黒岩 涙香 1862年(文久2) 9月29日

【児童生徒文学作品朗読コンクール】

朗読をととして、文学の楽しみをさらに深めていただければと第3回児童生徒文学作品朗読コンクールを実施致します。

■対象県内の小中学生の各学校代表
■地区予選ののち本選を行います。
■第1次審査(県内3会場) 10時から
8月18日(金) 大方あかつき館
8月21日(月) 安芸市中央公民館
8月24日(木) 高知県立文学館

■最終審査(第1次審査で選出された児童生徒の公開審査及び表彰式、記念講演会)
11月5日(日) 午後1時から

◆参加申し込み方法◆
各学校を通じてお申し込みください。締め切りは7月10日(月)。
お問い合わせは、高知県立文学館「朗読コンクール係」まで。

2000年夏季特別展 ～幻の童謡詩人～ 金子みすゞの世界展

7月8日(土)～8月20日(日)

◆＜プレイベント 金子みすゞ作品朗読会＞
毎月恒例の文学館朗読の会のスペシャル企画。高知朗読奉仕者友の会メンバーによる、金子みすゞの詩の朗読。また、「歌になった金子みすゞ」コーナーも。
※7月2日(日)14時から ※文学館ホールにて ※入場無料

◆＜オープニング式典＞
金子みすゞ長女・上村ふさえさん、児童文学者・矢崎節夫さんなどによるテープカット。※7月8日(土)10時から

「片木太郎の風景」展
8月25日(金)～9月16日(土)
木版画を中心に展示します。

詩と童謡コンサート

金子みすゞのゆうべ
◆7月23日(日)18時半～
◆県民文化ホール(オレンジ)にて
安芸市在住の西村直記さんの音楽、女優・日色ともあさんの詩の朗読、高知少女少女合唱団の合唱などで、幻の童謡詩人・金子みすゞのやさしい世界にふれていただきます。
◇一般1,700円、高校生以下1,500円
◇前売り券は文学館窓口ほか、県下プレイガイドで好評発売中。

【休館日】7月— 3, 10, 17, 24, 31日 8月— 7, 14, 21, 28日 9月— 4, 11, 18, 25日

次回企画展予告 土佐の反骨・田岡嶺雲展(仮題) 2000年10月18日(水)～12月3日(日)

1870年高知市赤石町に生まれた反骨の思想家、自伝文学の傑作『数奇伝』の著者、田岡嶺雲の生誕130年を記念し企画展示。11月11日(土)には、国際シンポジウムも予定。



利用案内

開館時間 午前9時～午後5時(入館は、午後4時30分まで)

休館日 毎週月曜日(休日・祝日の場合はその翌日)
年末年始(12月26日～1月1日)

観覧料 一般350円
特別企画展のあるときは、料金が変わります。[一般550円]
20人以上の団体は2割引。高校生以下、高知県(市)長寿手帳所持者及び身体障害者手帳、療育手帳、障害者手帳所持者等とその介護者1名は無料です。

駐車場 なし。ただし近辺に有料駐車場があります。

貸出施設 企画展示室、ホール、茶室

交通のご案内



- 高知空港より空港バスではりまや橋下車徒歩20分
- JR高知駅下車徒歩20分
- 土佐電鉄高知駅前下車北へ徒歩5分
- バス停公園通り下車北へ徒歩5分

高知県立文学館

高知市丸ノ内1丁目1-20
電話 088-822-0231
FAX 088-871-7857
e-mail bungaku@tosa.net-kochi.gr.jp
http://www2.net-kochi.gr.jp/~kenbunka/bungaku/
〒780-0850